

支那語の「重念」と「四聲」の関係に就いて

栗 山 茂

- 一、「重念」の意義
- 二、「重念」と「四聲」の變化
- 三、二字より成る語句の上字が「重念」される場合に於ける「四聲」の變化
- 四、目上下字が「重念」される場合に於ける「四聲」の變化
- 五、「重念」の位置

一 重念の意義

支那語でいふ「重念」とは又「重讀」ともいひ、二字以上より成る語句の或文字を特に強く明瞭に讀むといふことで、英語などに於ける「アクセント」や「エンファシス」に相當するものである。

凡そ何れの國語にもせよ、それが言葉として音聲を以て口から話される場合、如何に文法上間違ひがなくとも

支那語の「重念」と「四聲」との関係に就いて

單に無暗に語音を並べただけでは完全な言葉といひ難い。それ／＼その國語の性質によりその國語獨特の「調子」(抑揚緩急)を有するものであるから、その「調子」を無視しては決して充分に意思や感情を表はし得るものではない。例へば歐洲語に於ける「アクセント」や「エンファシス」の如きものがその「調子」を決定するものであり、それが單に各語々々について一定してゐる許りでなくその言葉の内容即ち疑問、肯定、否定、感嘆などの場合により夫々その「調子」が定つてゐるものであるから、これ等歐洲語を研究するものにとり、この「アクセント」や「エンファシス」が如何に重要なものであるかは今更ら申す迄もない。

最も單調にして自由であり、「アクセント」がないといはるゝ我が日本語にも、これを仔細に検討する時、そこには或る特別の日本語としての「調子」があることが分る。單に日本語全體の「調子」としてのみではなく、各々この語句についても亦一定の「調子」があることが發見される。試みに外國人の日本語を聞いて御覽なさい。彼等にして相當巧みに日本語を操るものでも、時々我々日本人の耳に異様に感ぜられるやうな日本語を話すことがあるが、彼等の語音が正しいかどうか、又文法上誤りがないかどうかといふことは別にしても、兎に角日本語にも外國人には容易に會得し難い日本語としての「調子」のあるといふことは否めない事實である。尙日本語には例へば、

はし(橋)……………はし(箸)……………はし(端)　くも(雲)……………くも(蜘蛛)　かへる(蛙)……………かへる(歸る)

などのやうに語音を同じうして意義を異にせる言葉が非常に多い。これ等は全く同じ「調子」に發音せられてゐるかといふに決してそうではない。それ／＼意義の異なるに従つてその「調子」を變へて發せられてゐる。尤も前に

も述べた通り日本語は極めて自然的であり、又比較的自由なものである上に更に地方々々によつて多少發音をも異にし「調子」にも差異があるものであるから、日本語の「調子」なるものは凡てかくの如きものなりとはつきり指摘し又規則づけることは出来ないけれども、日本語としての「調子」は嚴然として存してゐるといふことが出来るのである。

然らば支那語の「調子」とは如何なるものかといふに、單綴音である漢字一字々々に一定の字音(讀方)がある外に、更に又四聲(上平、下平、上聲、去聲)……抑揚高低の調子を定めるもの……といふものがあつてその文字の抑揚高低がチャンと規定されてゐる。即ちこの文字は讀方はこうで「調子」はこう、だといふことがはつきり定められてあつて、讀方は勿論のこと、その「調子」も定められた以外には一步も出ること許されないものである。それは何故かといふに、支那語は同音にして意義の異つた言葉が極めて多く、それ等の意義をこの「調子」の變化によつて辛うじて明らかにしてゐるやうな状態であるから、話しする場合に若しこの「調子」を間違へたら意義も亦自ら變つて來て、時には自分の云はんと欲することゝ全く反對な意味となるからである。

英語其他の外國語にも凡て一語々々に定められた「アクセント」(調子)なるものがある。けれどもそれ等は普通單に一語中の或る母音を強く讀むといふに止り、又支那語でいふ四聲のやうに一々その高低緩急は何等規定されてゐない。従つて英語などに於ては、「アクセント」のある母音以外の綴音の上げ下げは比較的自由であり、又文章全體の「調子」からいつても、「イエス」若くは「ノー」を以て答ふべき疑問文に於ては文尾の「調子」を上昇さ

せ、然らざる疑問文に於ては文尾の「調子」を下降させるといつたやうな習慣があるが、支那語に於ては前述の理由により、その文が如何なる内容を持つものであらうとも、各文字に定められたる一定の「調子」以外に各自勝手に如何なる調子をもつけることが出来ないものである。支那語に於てはこの四聲の「調子」が即ち支那語の「調子」の根本をなすもので、この四聲の「調子」をなくしては即ち話す言葉としての支那語がないといふことも出来るのである。

然らば支那語の「調子」としては、漢字一字々々について定められてゐるこの四聲を正しく完全に出してさへ居ればそれで充分かといふに決してそうではない。大體の「調子」としてはそれでよいとしても、支那語の口語體に於ては、普通漢字一字のみを以て一語としての纏つた意義を有するもの極めて少く、大抵は二字三字若くはそれ以上の漢字が結合されて一つの意味を表はすものが多い關係上、その一語を構成する各字に自ら意味の輕重が出來、こゝに自然の勢として、或は又習慣として或文字を強く讀み、或文字を軽く讀むといふことが出來て來るのである。「強く讀む」とは特にその字の四聲を正しくして一段と強く明瞭に發音することを云ふので、支那語ではこれを「重念」若くは「重讀」といふ。これと反對に極めて軽く不明瞭に發音すること、これを「輕念」又は「輕讀」と稱し、支那語の「調子」としては極めて重要なものである。只「重念」「輕念」だけならばまだよいが、この「重念」「輕念」の關係により從來の四聲に變化を與へるから面倒になるのである。この「重念」は又單に二字以上より成る單語にも存する許りでなく、これ等の單語が文法的規則の下に結合されて文を成す場合にも亦そこに文としての

輕重の箇所が生じ、これ等單語に於ける「重念」「輕念」と文章に於ける「重念」「輕念」とがウ、マ、ク、按排されて始めて完全な支那語の「調子」となり、意味も始めて明瞭となるのであるが、この文章としての「重念」の説明はこれに別の機會に譲ることとし、更に又溯つて支那語の發言、四聲に就いても根本的に述べる必要があると思ふけれど、こゝでは讀者の凡てが既に支那語の發言、四聲に精通してゐるものとして更めて述べないこととする。唯四聲の中の第一聲に就いては曖昧な點もあるので一應の説明を加へることにした。

支那語の「重念」は「四聲」と共に支那語を話す上に極めて重要な役割を演ずるものであるが、扱て然らば「重念」「輕念」は如何なる語に起るべきか？その間一定した方則がないだらうか？尙或る文字の「重念」の爲にその語詞の各文字の四聲に變化を來さないだらうか？若し變化を來すとすれば如何なる場合に如何なる變化を起すか？それにも一定した方則がないだらうか？といふことを研究するのが本稿の眼目とするところであるが、これは支那語學者に取つても極めて面倒な問題で、從來未だこれに關する充分な研究が行はれ居らず、従つて參考書も尠く、假りにあつてもその所説必ずしも一定せずといつた状態で、到底我々未熟な日本人の能くすべき所ではない。又實際人によつて夫々異つた感情や意思を最も率直に表はすべき言葉を一定の「調子」に當てはめやうとすること寧ろ不自然、不合理極まるものであるかも知れないけれども、さりとて「重念」は何れに置くも可なりといふ譯にはいかぬ。夫々言葉によつて大體「重念」の位置や「調子」が一定してゐるものであるから、それらの言葉から歸納して大體の標準、規則といつたやうなものを見出して見たが、私の研究としても未だ完成の域に達して居らず、

所々間違つた點、無理な點もあらうと思ふから、只管同學諸賢の御叱正を御願する次第である。

二 「重念」と「四聲」の變化

一體「重念」は何れの字に置かるべきかといふことについては、これ又その國の習慣や語調などの關係もあつて一概に論ずることは出来ないけれども、先づ原則としては、その語句中最も重要な字に置かるべきものであるといふことは「重念」の定義から容易に考へ得られる。即ち「重念」の位置はその語句中に於ける文字の重要さによつて決定するといふことが出来る。従つて重念の位置は語句によつて一定してゐない。或ものは上字に或は下字にある。「重念」の文字は意味を明瞭にする爲に他の文字よりも一層四聲を正しく更に一段と強勢して發せらるべきものであるから、前にも述べた通り原則としてはその「重念」される文字に四聲の變化を來すことがないのである。然らば或る文字の「重念」によつてその前後の文字は如何なる影響を受けるかといふに、それも「重念」のその語句に於ける位置によつて相異なるものである。例へば「重念」が語句の一番上の文字にある時、或はそれが語句の眞中若くは一番下の文字にある時によつて一樣に論ずることは出来ないのである。今これから「重念」の位置により、その前後の文字の「四聲」が如何に變化するものであるかについて述べて見やう。

三

二字より成れる語句の上字が重念される場合に於ける「四聲」の變化

「重念」が語句の一番上の字にあるといことは「重念」の原則により、一番上の字がその語句に於ける最も重要な字であり、この一番上の文字さへ「重念」して讀めば意味が明瞭であり、第二字以下はなくてもよい程軽い意味しか持つてゐないものであるといふことを示すものである。これ等の語句は自然の勢として第二字以下は極めて軽く自然に發せらるゝのが普通である。即ち下字の四聲が何であらうともその四聲に拘泥せず、上の字を發した餘勢を驅つて一氣に軽く短く不明瞭に發するのである。四聲に抱泥せずといふことになると、前に述べた四聲の原則に矛盾するやうに思はれるが必ずしもそうではなく、實際言葉として用ひられる場合、餘り重要でない言葉は出来るだけ軽いふといふのが、何れの國語でも同じことで、それが又最も自然なのである。多くの支那語學者は支那語のこの軽く不明瞭に讀む調子を「第一聲の如く」とか、又は「軽い第一聲」の如くとかいつて總てをアツサリ片付けてゐるが、これは決してそんな簡単に決定さるべきものではない。所謂「輕念」さるべき下字の調子も、「重念」さるべき上字の四聲が何であるかによつて決定するのである。今左に上字が「重念」で下字が「輕念」の二字より成る語句十六個調子を圖示すれば次の如し。

支那語の「重念」と「四聲」との関係に就いて

| 去 聲 | 上 聲 | 下 平 | 上 平 | 聲 語尾 | 聲 |
|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|----------------|--------|
| 趙 _△ 家 _△ | 李 _△ 家 _△ | 王 _△ 家 _△ | 張 _△ 家 _△ | 家 _△ | 上 平 |
| 外 _△ 頭 _△ | 裏 _△ 頭 _△ | 饅 _△ 頭 _△ | 了 _△ 頭 _△ | 頭 _△ | 下 平 |
| 饜 _△ 裏 _△ | 水 _△ 裏 _△ | 皮 _△ 裏 _△ | 家 _△ 裏 _△ | 裏 _△ | 上 聲 |
| 去 _△ 過 _△ | 打 _△ 過 _△ | 藏 _△ 過 _△ | 說 _△ 過 _△ | 過 _△ | 去 聲 |

「重念」を表はすに別に一定した符號といふものがないが、我國で最も廣く使用されてゐるのは「重念」のある文字の右側に縦線を引いて表はす方法であるから本稿にも凡てその方法によることにした。

(註) | ……重念符號

○ ……元來の聲

△ ……變聲符號 □ ……低音の第一聲

⊂ ……「半上」又は「半賞」といひ第三

聲前半の低音調子

右表はすべて「重念」さるべき上字文字に夫々「輕念」さるべき「家」「頭」「裏」「過」などの文字が結合して出来た十六個の場合であるが、さてその個々の場合四聲が如何に變化するかといふに、先づこの第一行目の上字が上平で「重念」のあるものについて述べやう。多くの日本の支那語學者は凡て前にも述べた通り、上字に「重念」がある場合、下字の四聲はどうであらうとも「輕い第一聲に讀む」といつてゐるが我々はこれについて更に慎重に吟味して見る必要があらうと思ふ。先づそれを吟味する前に抑々支那語の第一聲なるものは如何なる調子なりやについて研究せねばならないことになる。何故ならばこの第一聲が如何なるものなりやといふことによつて彼等の所謂「輕い第一聲に」といふことが始めて吟味し得らるゝからである。

扱て然らば支那語の第一聲は如何なる聲調を有するものかといふに人々は色々に説明を加へてゐるが凡てその説く所は大同小異である。今その最も代表的と思はるゝ左記數氏の中華民國人の説明を引用すれば次の通りである。

- 王 璞 氏 第一聲……………聲浪直而平
汪 怡 氏 第一聲……………高(音度) 長(音長)
關恩福氏 第一聲……………平而聲直
趙元任氏 第一聲……………高而不變的

以上掲げた四氏の説明は勿論概括的且抽象的で、尙幾多捕捉し難い所はあるが、少くとも彼等の説明の中か

支那語の「重念」と「四聲」との關係に就いて

ら、第一聲の調子は高くして平らかで眞直ぐな、言ひ換へれば第一聲の調子とは高くして高低のない平らかな音であるといふことが云へる。高低のない平らかな音とは大體工場や汽船の汽笛のやうな調子に眞直ぐに引くのだらうとは想像はつくが、さて問題はこの高さである。この高さについては黎錦黈氏は國語模範讀本に、又趙元任氏は國語留聲出課本に於て共に左記の通り音譜によつて説明してゐるからその調子は自ら明瞭であらう。



上の音譜によつて我々は即ち第一聲の調子はハ調高音のものであるといふことが解る。こゝに於て第一聲は決して低い調子でなく相當高い調子であるといふ結論に到した。この結論によつて更に翻つて彼等の所謂軽い第一聲なる説明を吟味して見やう。第一聲は高い音だといふから、如何に軽く出して、調子を下げない以上は決してその高い調子は下るものでない。又第一聲は平かで高低のない音だといふから、如何に軽く發音してもその調子は下降すべきものでない。従つて彼等の所謂軽い第一聲なるものも、唯第一聲を軽く發音されるのみでその音の高低にはそれが「重念」される時と何等變ることがない筈である。この兩方の結論から我々は再び出發點に歸つてあの表の第一行目の四聲の變化を検討して見やう。

「重念」は原則として其の語句に於ける最も重要な語に置かれるものであるから、「張家」、「丁頭」、「家裏」、「說過」の上字の四聲は變化しない。のみならず特に強勢して讀むのである。次に「家」、「頭」、「裏」、「過」などの「輕念」さるべき文字の四聲はどうなるかといふに、これ等は上字を強く發した餘勢を以て極めて軽く發せらるゝ關係

上、その本来の四聲に大いなる變化を來すものである。單に四聲に變化を來すのみならず又中には發音に變化を來すものさへある。上字を強く發した餘勢を以て極めて軽く發するとはどうするかといふに、例へば「張家」の例で記せば、先づ「張(ちアン)」と高音の第一聲に平らかに出し、そしてガタンと調子を落して低く消え去るやうに「家(チアー)」を發するのである。その實際の高さはどうなるかといふに、普通の高い第一聲の調子から云ふと、一オクターヴ、即ち一音階だけ下つた低音の第一聲の調子となるのである。従つてその高さから云つても上字と下字とは非常な差があり、これを第一聲の延長と考へたり、又軽い第一聲と見ることは誤りであることが明白であらう。今この「張家」の語の實際の調子を圖示すれば上圖のやうになる。



この調子は單に「張家」の如き上字第一聲にして「重念」、下字第一聲にして「輕念」の語句にのみ適用さるゝ標準ではなく、其他「了頭」、「家裏」、「說過」などのやうな上字第一聲にして重念、下字が夫々輕念の第二、第三、第四聲から成る語句には凡て適用され、これ等の語句はその下字の四聲の如何に拘らず凡てこの「張家」の如き調子となるのである。

次に第二行目を見るに上字は凡て「重念」される第二聲の「王」、「饅」、「皮」、「藏」であり、下字は夫々「輕念」される「家」、「頭」、「裏」、「過」の語句であるが、この上字の四聲即ち第二聲に變化を來すものでないといふことは

支那語の「重念」と「四聲」との關係に就いて

上字第一聲にして「重念」のあつた前の場合と同じである。然らば下字の「家」、「頭」、「裏」、「過」の調子はどうかといふに、第二聲の最も高い頂點の高さは私の見解によれば全く第一聲の高さと同じであるから、従つてこれ等の下字も凡て前の場合と同じやうに軽く短い一オクターヴ下つた低音の第一聲に發すればよいのである。

の調子も單にこれらの語句に限らず、凡て上字第二聲に「重念」があり、下字を「輕念」する凡ての語句に適用されるのである。今この場合の調子を圖示すれば上圖のやうになる。



次に第三行目の「李家」、「裏頭」、「水裏」、「打過」などの如く上字が凡て「重念」さるべきか三聲で下字が夫々「輕念」さるべきか第一、第二、第三、第四聲である場合、この場合どうなるかといふに、前二者の場合と異り、上の重念さるべき第三聲が聲に變化を來して來る。第三聲の完全な調子は前にも述べた通り低音より起り稍々長く引いて漸次音尾の上昇するものであるが、實際この完全な調子としての第三聲は、第三聲が單獨に發音される時か、若くは文章の終りにあつて而もそれに重念がある時以外は殆んど發せらるゝことなく、大抵は第三聲の最後の上昇する部分が省略された唯低い調子のみの第三聲（これを半上、又は半賞といふ）が使用されてゐる。例へば「五」、「書好」の「五」や「好」は完全な調子の第三聲であるが、「好書」の「好」、「趨上」の「趨」、「你們」の「你」などは唯第三聲の低い調子しか發音されてゐない「半上」の調子である。この場合もやはり上字は凡て「半上」の第三聲となつて唯低い調子のみが發音されるのである。更に下字の

調子はどうかといふに、これは前二者とは大分異なる。前二者は凡て軽く短い低音の第一聲の調子となつたのであるが、この「重念」される第三聲が上にある場合にはこれ等「重念」されない文字の調子が前二者の場合よりも大分高くなり軽くて短くはあるが大體ハ調の⁸⁰の音の高さと同じやうになるのである。これも音調調和の自然法則から来る結果である。第三聲の調子としてはこの場合は前半しか發言されて居らず極めて不自然な調子であるから常に完全な第三聲に復歸しやうとするものであるから次に來る文字の調子が「重念」されないものである場合には、その文字の調子が高く上昇して完全な第三聲の上昇の部分となりそしてこの上字の「半賞」聲と結合してこゝに始めて完全な第三聲となるものである。即ち「李家」の例で申せば、「李」の調子が第三聲の低い調子となり、「家」が第三聲の最後の上昇する部分となつてこの二字で以てこゝに一個の完全なる調子の第三聲が形成されるのである。従つて「李家」、「裏頭」、「水裏」、「打過」などの語句も下字が夫々その四聲を異にしてゐるに拘らずして



同じ調子に發言される。唯「水裏」の二字は共に第三聲の調子である爲、變聲の規則により上字の第三聲は第二聲に變り得るのであるが「重念」には何等變りがない。「水」が第二聲に變つた場合の「裏」の調子は既に上述の通りである。今この調子を圖示すれば次の通りである。

(低音)
次に第四行目の「趙家」、「外頭」、「裏裏」、「去過」などの如く上字が凡て「重念」されるべき第四聲で下字が夫々「輕念」されるべき第一、第二、第三、第四聲である場合どうなるか

支那語の「重念」と「四聲」との關係に就いて

といふに、上字の第四聲はやはり變化することがない。下字の調子はどうかといふに上述の上字第一聲、上字第二聲の場合と同じく大體低音の第一聲の調子に發すればよい。唯この場合下字の調子は前二者に比し稍々低くなるといへやう。第四聲の調子は始め高音から起り、急に下降する調子であり、而も音尾が軽く消え去るやうに發するものであるが、如何に下降するといつても決して限度がない譯ではなく、音の高さから云へば大體一オクタ1 ヲ下つた第一聲の高さ邊りで停止するものであると私は考へてゐる。従つて「趙家」、「頭」、「裏」、「過」などの如く上字が凡て「重念」さるべき第四聲で、下字が夫々「家」、「頭」、「裏」、「過」などのやうな「輕念字」である場合には、上字の第四聲は完全に最後まで發音せずに最後の低音の部分を残して發言すべきものである。この最後の低音の部分に下字の「家」、「頭」などの低音が入つて來て第四聲の最後の部分となるのである。従つて下字の調子は上字第四聲の一部或は延長と見ることが出來、これ等「重念」される第四聲の下に置かるゝ輕念の文字はその四聲の如何を問はず凡てこの低い調子となるのである。今この調子を圖示すれば次のやうになる。



以上上字に重念のある十六個の場合について説明を試みたが、その説明によつて大體の調子が理解されたことと思ふ。又一般に云はれてゐるところの「上字に「重念」ある時下字はその元來の聲の如何に拘らず輕い第一聲に讀む」といふ言葉が如何に實際より遠いものであるかといふことが分つたであらう。

(註) 北平語の第一聲には二つの調子がある。一つは前にも度々述べた高くして平かな調子、今一つは第四聲のやうに漸次下降するもので第四聲に近い調子である。この兩種の調子は共に北平人によつて話される調子ではあるが、前者は北平での普通一般の人の言葉の調子であり、後者は主として城内に使用される一種のキザな言葉の調子である。従つて我々が單に北平語として話をする場合には兩者その何れを探るも何等差支へはないのであるが、苟くも前者が中華民國の標準語の調子として定められたる以上、我々はその前者の調子に従ふのが當然だと思ふ。我が國に於ける支那語の學者の第一聲の説明も大抵この前者に據つてゐるのであるが、扱てそれ等の人の實際の第一聲の調子を聞いて見るに(音の高低は問題ではない)この平らかな高低のない調子に發する人は極めて少いやうである。第一聲は「平らかで高低のない調子である」と明確に説明を與へてゐるながら、その實際の調子はいふと第四聲と殆んど區別のないものが多いやうである。こゝにいふ言行相矛盾する説明は如何であらうか? 上述の通り事實北平語には第四聲と同じやうな第一聲の調子がある以上これを直ちに間違ひだといつて退けることは出来ないけれども、それならそれで第一聲の説明を改める必要がありはしないだらうか。若し従前のやうに上平は「聲浪直而平」といふ説明でやらうとすれば、どうしても説明の通りに正しく發音すべきものである。従つて今迄述べて來た「輕念」すべき文字の調子も、宛も第四聲の調子のやうに發する彼等の第一聲の調子から云へば或はこれ等「輕念」すべき文字の調子は「輕い第一聲に發す」といつた方が解り易いかも知れないけれども、少くとも高くして平かな第一聲から云ふとそれは誤りである。

四 二字より成る語句の下字が「重念」される場合に於ける四聲の變化

支那語の二字若くは二字以上より成る語句に於ける重要な字が常に上字にあるものとは限らない。支那語の語

支那語の「重念」と「四聲」との関係に就いて

句は色々の漢字が結合されて出来てゐるものであるから時に重要な字がその語句の上にあつたり、又時には下にあつたりすることがある。普通「重念」はその語句に於ける重要な字にあるから、重要な字が上にある時には上字を「重念」し、下にある時には下字を「重念」するのである。上字に「重念」のある場合に於ける下字の四聲の變化は前述の如く凡て低い短い調子となつたから、下字に「重念」がある場合に於ても上字が低い短い不明瞭な調子となるかといふに決してそうではない。一語句の下字に「重念」がある場合は固より色々習慣などもあつて一概には云へないけれども下字が「重要」な意味を有する場合か、若くは下字まで明瞭に讀まなければ意味が明瞭でない語句の場合に多い關係上、従つて意味を徹底させる爲には下字は勿論、上字迄も正確に明瞭に發音すべきことを要するものであるから、原則として上字も下字もその元來の四聲に變化を來さず、唯下字は「重念」さるべきを以て上字よりも強く明瞭に發すればよいのである。

茲に稍々注意しなければならぬ問題がある。左記の表によつて説明を加へて見やう。

支那語の「重念」と「四聲」との關係に就いて

| 去 | 聲上 | 平下 | 平上 | 聲 | |
|----------|----------|----------|----------|--------|--------|
| 探● | 土● | ●奇 | ●多 | 上 字 | 聲 |
| 探● 山○ | 土● 山○ | ●奇 ○山 | ●多 ○山 | 山 | 上 平 |
| 探● 人○ | 土● 人○ | ●奇 ○人 | ●多 ○人 | 人 | 下 平 |
| 探● 井○ | 土● 井○ | ●奇 井○ | ●多 井○ | 井 | 上 聲 |
| 探● 路○ | 土● 路○ | ●奇 路○ | ●多 路○ | 路 | 去 聲 |

先づ第一行を見るに、上字は凡て第一聲の「多」字、下字は夫々重念される第一聲「山」、第二聲「人」、第三聲「井」、第四聲「路」、の字である。この場合上字の第一聲「多」はその四聲に何等の影響をも受けないかといふに必ずしもそうでない。我々が支那人の言ふ言葉を嚴密にこれを聞き分けるならば、同じ第一聲でもこれに重念のある時は稍々高目にそして少し長く、正しい調子の第一聲が發せられてゐるが、「多山」のやうに第一聲の下にある文字に「重念」のある場合には、上の第一聲の調子心持ち低く且つ短かく發せられてゐるといふ

ことが發見されるのである。しかしこの高い低いといつてもその差は極めて微弱なものであるから少しも氣がつかないでゐる人が多いだらう。例へば「吃的」の「吃」と「吃飯」の「吃」とを比較して見るに、共に同じ第一聲の「吃」ではあるがこれを實際に言葉として口から發せられる時、兩者の調子には稍々相異なるものがあるのである。即ち「吃的」の「吃」は下字の「的」が極めて軽い低い短い調子であり、何物にも牽制されないから充分思ひ切つて發し得る關係上、その音調も幾分高目で長くなるのは當然で、これに反し、「吃飯」の「吃」は下字「重念」の「飯」に牽制され幾分遠慮せねばならないといふことになり自然音調が幾分低く短くなるのである。

扱て上表第一行目の各語句の下字の調子はどうかといふに何等變化せず、夫々元來の四聲を正確に發音すればよい。

次に第二行目の上字第二聲の「奇」に夫々「山」、「人」、「井」、「路」の「重念」ある文字が附加された場合を考へるに、これも第一行に於ける「多」と同じく、「奇」が「的」などの「輕念」される字の上にある時は充分高く上昇した稍々長目の完全な第二聲となるが、第二行の各語句のやうに「奇」が「重念」される文字の上に冠せらるる場合はやはり下字の牽制を受けて充分高く上昇することが出來ず、やゝ低目に停止する第二聲の調子となつて下字につゞくのである。従つてこの「奇」の調子も實際は完全な第二聲といふことは出來ないのであるが、しかしこれも餘程注意してゐないと氣がつかないものである。

次に第三行目は上字第三聲「土」に夫々「重念」されるべき「山」、「人」、「井」、「路」の添加された場合であるが、こ

れは極めて簡單で上字の第三聲が半上であるといふこと、第三聲が重複する場合上字は第二聲に變化するといふことに注意して夫々下字を正確に發音すればよいのである。

最後は上字第四聲「探」に夫々四聲の異つた四個の文字が添加されて作られた場合であるが、この場合も嚴密に云へば「探」の調子が變つてゐるといへやう。即ち上字第四聲は重念される下字の制肘を受けて稍々下り足らない不完全な第四聲の調子となつて下字につゞくものである。下字の調子の變化しないことは申す迄もない。

以上三十二個の組合せの下重念と四聲との關係について大體の説明を加へ、同一條件の下に於ける大體の標準を見出したのであるがこれも決して絶體的決定的のものでなく、時と場所と人により多少變化することあるはどうしても免れないところである。

五 重念の位置

以上で大體「重念」の意義とそれに伴つて起る四聲の變化を述べたのであるが、更に進んで「重念」は如何なる語句の如何なる字にあるかに就いて研究をして見やう。

支那語の各文字の四聲は我々が辭書を見ることによつて容易に知ることが出来るが、この「重念」の位置に至つては何れの辭書もこれを示してゐない。蓋し支那語の「重念」の位置は英語の「アクセント」のやうに一字々々についで一定不變のものでなく語句の内容によつて異なるからである。支那語に於ては即ち語句の「重念」の位置によ

つて全然意味を異にする場合もあるけれども、語句によつては何れを「重念」するも意義にさしたる變化を來さないものがあつたり、又時と場合により、或は又話す人の氣持によつて重念の位置が移動することがあつたりして一々はつきり示すことが不可能であるからであらう。然らば「重念」などどうでもよいかといふに決してそうではない。「重念」は語句に於ける内容を決定するものであり、又支那語としての調子を整へるものであるから、話をする場合に於ては常にこの「重念」の位置に注意しなければならない。支那語に於てはこの「重念」の位置を誤らず、而もこの「重念」の文字の四聲と發音とを正確に出しさへすれば意味が明瞭になり、他の文字の四聲や發音はどうでもよいとさへ云ふ人がある位だから、如何にこの「重念」の位置が重要であるかといふことが了解されるであらう。

扱て然らばこの「重念」なるものは如何なる語の如何なる文字にあるかといふにこれ又容易ならぬ問題である。「重念」はその語句中に於ける最も重要な字にあるといふけれども、何れが重要かといふ判断に苦しむ場合が出来たり、又習慣などもあつたりしてそう簡單には決定出来ないものである。がしかし我々が日常使用する言葉の「重念」といふものは大體一定してゐるものであるから、それ等から歸納して左記に大體の標準を立て、は見たが、例外が非常に多く仲々具合よくいかない。粗漏杜撰の點も相當多いこと、思ふが少しでも斯界に貢獻する所あらば望外の喜である。

(1) 人名は最後の字を「重念」する。

蔣中正(姓と名) 蔣介石(姓と號) 張良 諸葛亮(姓と名) 諸葛孔明(姓と號) 山田(姓) 山田實(姓と名) 阿毛

阿菊 張三 李四

但し左記人名の「子」、「公」は敬稱であるから「重念」しない。が併し「椅子」や「帽子」の「子」の様に「輕念」すべきでない。こゝでは軽い第三聲の半上に讀めばよい。尙重念による四聲の變化は凡て「重念と四聲との變化」の項に於て述べた標準によればよいのである。

孔子 孟子 老子 莊子 公孫龍子 曾文正公

(2) 二字より成る國名、地名は上字を「重念」する。

中國 英國 美國 德國 法國

上海 北平 天津 新京 奉天 香港 大連 青島 神戶 門司 橫濱 紐育 倫敦 巴里

江蘇 山東 河南 熱河

(3) 年號名は普通下字を「重念」す。

宣統 同治 道光 咸豐 乾隆 康熙 昭和 大正 明治

例外 成化

(4) 三字以上より成る國名、地名、海洋名、島名、山名、河名、團體名等の固有名詞は最後の字を重念す。

英吉利 美利堅 墨西哥 意大利 可倫比亞 羅馬尼亞 哥斯德耳黎加

支那語の「重念」と「四聲」との關係に就いて

高松高等商業學校開校十周年記念論文集

五〇四

哈爾濱 山海關 張家口 舊金山 華盛頓 新嘉坡 齊々哈爾 烏里雅蘇臺

太平洋 大西洋 印度洋 地中海

愛斯蘭 北海道 馬達加斯加

娥媚山 萬壽山 富士山 興安嶺

楊子江 鴨綠江 黃浦江 利根川

南滿鐵路公司 清華學校

外交部 國際聯盟 全國經濟委員會

尙これ等固有名詞の略稱もその字數の如何に拘らず「重念」は最後の字にあり。

外部 國聯

(5) 二個の文字が合體して一個の觀念を表はすものにして、これを別々に切り離す時はもとの意味を失ふ語は上字を「重念」す。

胡同 行李 合同 東西 買賣 夥計 這個 這兒 那個 那個 那兒 甚麼 多麼 這麼 那麼 那麼

(以上名詞、代名詞、副詞)

結實 糊塗 混賬 便宜 利害 (以上形容詞)

(6) (a) 子、兒、上、下、裏、頭などの接尾詞が主字なる名詞の下に添加されて主字の意味を助くもの、上字を「重

念しす。

房子 桌子 帽子 花子 花兒 曲兒 畫兒 街上 晚上 鄉下 節下 家裏 回裏 木頭 石頭
 (b) 其他の字が主字たる名詞の下に添加されて主字の意味を助くる場合、上字を「重念」す。

國家 人家 月亮 早起 雲彩 露水 茶水 燈籠 商業 商人 工人 明白 地方
 (7) 着的(得)、了、磨(啊嗎)、啊、罷、們などが助詞として用ひらる場合、上字を重念す。

吃着 來着 躺着 帶着 穿得 頑得 買得 用得
 他的 懶的 我的 貴的 開了 來了 走了 去了

說麼 甚麼 好麼 這麼 天啊 人啊 好啊 住哪
 說罷 來罷 走罷 看罷 他們 俗們 儂們

(8) 同義の若くは意義相似たる二字の結合せるものは上字を「重念」す。

世界 身體 時刻 年齡 自己 樹木 衣裳 言語 道理 章程 規矩 (以上名詞)

尙右は大體の原則であるが習慣上又は語調の關係から必ずしも一定してゐない。前例の「世界」「自己」などは「世界」「自己」もよそ。

希望 看見 搜尋 告訴 製造 喜歡 休息 學習 研究 答應 救濟 (以上動詞)
 容易 堅固 興旺 爽快 美麗 柔軟 新鮮 危險 暖和 聰明 (以上形容詞)

支那語の「重念」と「四聲」との關係に就いて

但し同意義より成る語句でも左記のものなどは下字を「重念」す。

緩慢 要緊 豊足 (形容詞)

應當 應該 該當 理當 理應 (以上助動詞)

(9) 副詞は多く下字を「重念」す。

大約 大概 攏總 假如 倘若 仍舊 好在 從前 本來 將來 現在 剛纔 勉強 立刻 眼下 早先
 往後 設若 況且 恐怕 到底 簡直 恰巧 特意 而且 自從

(10) 對立的意義を有する二字、即ち意義の相反する二字の結合せる語は下字を「重念」す。

天地 男女 東西 官民 父子 夫妻 上下 早晚 内外 陰陽 (以上名詞)

開閉 出入 問答 上下 來去 生死 長落 昇降 喜怒 哀樂 (以上動詞)

大小 多少 高低 長短 好歹 貴賤 真假 好壞 冷熱 是非 粗細 (以上形容詞)

尙左記の語は對立的意義を有せず、二個が結合して一つの纏つた意味を表はすものであるから下字を「重念」す。

鋪蓋(蒲團) 動靜(消息) 買賣(商賣)

又「多少」「好歹」が疑問詞と用ひらるゝ場合、上字を「重念」す。

(11) 形容詞、動詞、又は名詞が主字たる名詞の上に冠せられて一語をなす場合、下字名詞を「重念」す。

(a) 形容詞の冠せらるもの。

大學 小刀 高樓 好天 黄金 白狗 貧民 好運 壞人 小兒 大人 老爺 大哥 老弟 少爺 尊堂
 高名 高壽 貴姓 貴處

(b) 名詞の冠せるもの。

酒杯 電話 樹枝 縣長 花園 杏仁 紙幣 前門 洋傘 市場 家兄 家父 舍弟 舍親 賤姓 草字
 敝國 令尊 令堂 令友 臺甫 寶眷

(c) 動詞の冠せるもの。

走獸 飛禽 來示 來信 教員 學校 教堂 操場 摺扇

但し左記のものは何れも上字を「重念」す。

今天 昨天 明天 前天 後天 上月 下月 今年 去年 明年 前年 後年

又これ等の語が相對立して特に兩者の區別を明かにする場合、若くは性別、職業別を示すものは上字を「重念」す。

紅花 白花 男人 女人 父親 母親 公雞 母雞 商人 工人

- (12) 主字たる名詞に二字以上より成る形容詞文字が冠せられて一名詞を成す場合、最後の主字名詞を「重念」す。
 即ち三字より成る名詞は下字を「重念」す。

支那語の「重念」と「四聲」との關係に就いて

英雄傳 外國話 時刻表 注音符號 仲秋節 標準國語 照像館

尙この形容的文字が多字に互る場合、又その形容的語中に「重念」「輕念」の生ずることあるは云ふ迄もない。

(13) 同一文字の重複して成れる語に於ける「重念」の位置は次の通りである。

(a) 重複せる單數名詞は上字を「重念」す。

爸爸 媽媽 太太 叔叔 姐姐 妹妹 奶奶 星星 (以上名詞)

右の「姐」、「奶」は共に第三聲なるも、この場合上字を「重念」するから上字が第二聲に變化せず、只上字第三聲は「半上」に變ずるのみ。下字は凡て「輕念字」となり四聲の變化することは申す迄もない。

(b) 多數又は連續を示す名詞は下字を「重念」す。

人人(兒) 家家(兒) 天天(兒) 個個(兒) 年年(兒) (以上名詞)

右の「兒」は單に名詞の接尾詞として添加されたもので、なくともよいが北方支那ではこの「兒」を附加した名詞が多い。

(c) 動詞の重複して命令若くは動作の始まりを表はすものは上字を「重念」す。動詞と動詞との間に「一」を挿入する場合も亦同じ。又二字より成る動詞の重複するもこの規則に従ふ。

看看 問問 聽一聽 聞一聞 打聽打聽 商量商量 研究研究

(f) 形容詞、副詞の重複せるものは下字を「重念」す。

小小「的東西」 朗朗「的晴天」 明明「的事」 高高「(兒)」 輕輕「(兒)」 短短「(兒)」 (以上形容詞)

常常「(兒的)」 快快「(兒的)」 好好「(兒的)」 巧巧「(兒的)」 偏偏「(兒的)」 (以上副詞)

これ等同一副詞が繰り返されて用ひらる場合は助詞の「兒的」がその下に伴ふを普通とし、而も「重念」が下字副詞にある許りでなく、又その下字副詞の四聲は次のやうな變化を來すものである。

副詞が第一聲若くは第二聲である場合、下二字は變化せず。

飄飄的飛 平平的流

副詞が第三聲若くは第四聲である場合、下字は凡て第一聲に變ず。

好好兒的走 慢慢兒的去

(14) 動詞の目的格は目的格を「重念」す。

喝酒 吃煙 買貨 學話 坐車 寫字 請客 看報 做官 發財 賠錢 沒有 失信 下雨 生氣 開門
但し他動詞の目的格となれる代名詞は常に「輕念」す。

給我一個 見他去 我勸備

「下雨」の「下」は自動詞にて従つて「雨」は目的格と看做す能はざるも普通「下雨」「下霧」「下霜」などの如く天候を表はす場合には他動詞的用法となる。

(15) 形容詞又は動詞が述語として名詞又は代名詞の下に附加される場合、その動詞又は形容詞を「重念」す。

支那語の「重念」と「四聲」との關係に就いて

天陰 頭歪 路遠 眼花 頭暈 書好

船滿 彌猜 誰來 水流 我想 人來 優勝劣敗 水落石出

(16) 主字動詞に動作の状態、程度、範圍、又は結果を表はす副詞、動詞の添加されるものは下字を「重念」す。

吃多 數清 擺好 背熟 好極 洗乾淨 說明白

好得多 冷得很 熱得慌

看完 辨到 鋸斷 看賦 走乏

但し副詞「一點兒」は重念せず。

喝一點兒 好一點兒

(17) 主字動詞の上に副詞が冠せられたる場合、主字動詞を「重念」す。

快去 請坐 對坐 多謝 常來 快完 後悔 早起

(18) 動詞が助動詞「能」、「別」、「可」、「難」、「要」などの後に置かれる時、動詞を「重念」す。

又 possible の助動詞「得」が複合動詞の中に入りて可能を表はす場合、「重念」は「得」の下字にあり。

能辯 別開 可傳 可惜 難免 要買 要去

看得見 扔得準 說得上來 走得開 過得去 回得來

(19) 副詞と形容詞と結合せるものにして上字副詞に下字形容詞の結合せるものは下字形容詞を「重念」す。

很好 太大 真妙 好些 最懶惰 多麝香

但し上字形容詞と下字副詞との間に「得」又は「的」を入れて上字形容詞を修飾する場合は下字副詞を「重念」す。

快的很 鈴的慌 疼的利害

(20) 動詞、形容詞の否定は動詞、形容詞を「重念」す。

不去 不要 不买 不来 没有 没去 没来 (以上動詞)

不好 不快 不大 不早 不很大 不大好 (以上形容詞)

(21) 否定詞「不」を複合動詞の中に挿んで不可能を表す場合には「不」の下字を「重念」す。

聽不懂 看不見 走不開 吃不了 拿不住 對不住 說不上來 吃不下 辨不到

例外 吃不得 了不得 說不得 恨不得

これらは不可能を表はさず、禁止を表はすものなれば上字を「重念」す。

(22) 聲音を表はす言葉は最後の字を「重念」す。

啲噠啲噠 豁喇喇 咕咚 唧唧咕咕 撲動 轟隆 丁令

例外 打哈哈

(23) 場所を表はす「地方兒」、時を表はす「時候兒」が「的」(……するところの)といふ關係代名詞の後に來る時は極めて軽く發音す。

支那語の「重念」と「四聲」との關係に就いて

我到過的地方 吃飯的地方 他來的時候兒 念書的時候兒

(24) 數量形容詞は普通數詞を「重念」するが但し單位を示す爲に用ひられる「一」は「重念」されず單位を表はす文字が「重念」される。

一個 兩年 三個月 四盞

第一 我三十二 初三 禮拜四

一次 一回 一打 一噸 一瓶 一會兒 一點兒

(25) 「一」と動詞との結合せるものは動詞を「重念」す。

一看 一來 一去 一聽 一說

(26) 次の不定數詞は下字を「重念」す。

兩三天 七八個月